

森 の 通 信

ウータン

SAVE THE TROPICAL FORESTS

38

Hutan

1995年12月5日発行



ウータン・森と生活を考える会

【一部】300円

〒530 大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308号「関西市民連合」事務所気付
phone 06-372-1561

【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

PRINTED ON RECYCLED PAPER

everybody on The 熱帯林!

藤村はるえ

ウータンのような運動体にとって、生態学というものは身近な学問であるはずですが、今ひとつ取っ付きにくい面もあります。

最近読んだ『生態学と社会』・伊藤嘉昭著（東海大学出版会）は副題に「経済社会系学生のための生態学入門」とあるように、だれでもわかりやすい内容になっています。

数字や数式の苦手な私は、そういう箇所はつい飛ばしてしまいましたが、それでも充分楽しく読めました。（しかし数字やグラフというのは、自治体と渡り合うときの重要な手段ですから逃げていてはいけけないと思うのですが……）

「生態学と環境問題とを知らずに会社や官庁や外郭団体を動かすことは、犯罪でさえありうる」という著者の言葉が、強く印象に残りました。



「ウータン活動報告」

8・30	APEC・NGO環境グループ学習会「APECと南北問題」
9・10	サラワク・キャンペーン委員会合会に参加、西岡。
9・18	関西熱帯木材削減委員会準備会、合会。
9・20	子ども権利センター主催「ブラジルから」アンテナノールさんら。辻村、西岡、荒木参加。
9・21	APEC・NGO環境グループ学習会「温暖化と大気汚染」等
9・21	出前講座・奥村知亜子*大阪YWCA（熱帯林と私達）
9・23	APEC・NGOセミナー
10・2	関西熱帯木材削減委員会準備会、合会
10・8	関西熱帯木材削減委員会発足。「関西発・森からのメッセージ」挨拶・（代表）寺田弁護士、講演・熊崎筑波大教授、百名弱参加。奥村*家の中の熱帯林*販売
10・14	NGO環境シンポ「APECは環境を守るか」百名。
10・15	ワン・ワールド・フェスティバルに参加
10・17	APEC・NGO合宿 於*関西セミナーハウス
10・22	板打旅イベント、大山収穫祭に参加。荒木ら
10・28	熱帯林連続講座Part3 ①住宅編 講師*北山さん
10・28	APEC・NGOシンポ「国際会議へ提言*経済・人権・環境」報告/神田、松野、西岡ら
10・30	関西熱帯木材削減委員会、合会
11・4	広島アジア・フォーラムで講演*辻村
11・12	APEC・NGO関西実行委の大阪集会に参加。四百人。
11・14	APEC・NGO国際会議に参加*辻村

CONTENTS

バガス【非木材紙・平和紙業】

【表紙イラスト】

木の上にいる獲物まで最も障害物の少ない場所を選び、吹き矢で狙いを定める。サラワク州、プナン人（『熱帯林に生きる』（SCC刊）掲載の太田康男さんの写真を元に描きました）

ウータン 38号 目次

関西熱帯木材使用削減委員会……	3
SOS!アマゾン熱帯林から……	4
編 家具① ……	8
パプアニューギニアをたずねて…	10
APECは環境を破壊する ……	12
おたより ……	14
編 「熱帯林を考える」 ……	15
猪俣栄一	
森の写真館	
「オランウータン」 ……	19

10/8 (日)

「関西熱帯木材使用削減委員会」が発足

ウータン熱帯林NGO、弁護士、建築家などで百名弱

(自治体キャンペーン、住宅、家具)

三部会設置 対策へ具体的提言

自治体への働きかけなど強化

関西で熱帯林の保護や国産材の見直しなどの活動を続けている市民団体や弁護士、学者、建築家などをつくる「関西熱帯木材使用削減委員会」(代表

開かれ、同削減委員会の発足を決めるとともに世界の熱帯林の現状や保護のあり方について学習を深めた。

保護への関心はここ数年高まり、広がっているが状況は大きく変わったといえない。NGOの声をネットワークで結集、使用削減について具体的提言をし、その代替案もふくめて提案しなければなら

ない」と削減委員会の役割を強調した。一方、基調講演を行った熊崎教授は「熱帯林保護運動はいま大きな転期を迎えている。それは面積が減り、木材の質が悪くなることと関わる」



熱帯木材の使用削減運動に本格的に取り組むため発足した「関西熱帯木材使用削減委員会」の発足集会

「関西発世界の森へのメッセージ」のタイトルで行われたシンポジウムでは、①基調講演「世界の熱帯林と保護」熊崎実氏(筑波大学教授)②パネル討論「世界の森へのメッセージ」パネラー③三澤文子氏(Ms建築設計事務所)、永田健一氏(家具製作室)、南俊二氏(自治体職員、熱帯林きようと)、コイデイネター④大西裕子氏(弁護士)のほか、同削減委員会の発足の確認、提言を検討する部会への参加要請の呼びかけが行われた。この中であいさつを行った寺田代表は「熱帯林

熱帯雨林保護策

10.7 日 新聞

近畿の市民団体など

家がネットワークを組んで、日、「関西熱帯木材使用削減委員会」を発足させる。土木事業や家具製造など主要分野ごとに部会を設置、熱帯材の使用削減

資源の枯渇が懸念されている熱帯雨林の保護策を、自治体や企業などに提言していくこと、関西の市民団体や弁護士、建築家が中心となり、各自治体などに働きかけたい。

参加

ど前置き、植林ツアーや投資で解決するものではないと強調。「この問題は世界の社会・経済システム、人々の生き方の問題につきあたると話し、カネで評価する経済至上主義の考え方からの脱却を訴えた。

パネル討論では、木造住宅にこだわる三澤氏、家具製作を通じて日本の家具材料市場の偏りを指摘した永田氏、自治体職員として自治体キャンペーンや建設行政のあり方に疑問を呈した南氏の発言が続いた。

同削減委員会では、この①自治体に熱帯材の使用抑制を訴える自治体キャンペーン部会②住宅部会③家具部会④住宅部会⑤家具部会⑥住宅部会⑦家具部会⑧住宅部会⑨家具部会⑩住宅部会⑪家具部会⑫住宅部会⑬家具部会⑭住宅部会⑮家具部会⑯住宅部会⑰家具部会⑱住宅部会⑲家具部会⑳住宅部会㉑家具部会㉒住宅部会㉓家具部会㉔住宅部会㉕家具部会㉖住宅部会㉗家具部会㉘住宅部会㉙家具部会㉚住宅部会㉛家具部会㉜住宅部会㉝家具部会㉞住宅部会㉟家具部会㊱住宅部会㊲家具部会㊳住宅部会㊴家具部会㊵住宅部会㊶家具部会㊷住宅部会㊸家具部会㊹住宅部会㊺家具部会

弁

関西熱帯木材使用削減委員会（愛称LONGHOUSE）発足式

シンポジウム



『関西発・世界の森へのメッセージ』



▲ 基調講演の熊崎教授(写真左)とコーディネーターの大西弁護士



▲ 関西熱帯木材使用削減委員会代表/寺田弁護士挨拶

関西熱帯木材使用削減委員会（愛称LONGHOUSE）の発足シンポジウム「関西発：世界の森へのメッセージ」は、十月八日にエール・大阪で約百人を集めて行われました。

委員会代表である寺田武彦弁護士からの挨拶のあと、まず熊崎実・筑波大学教授より基調講演が行われました。熊崎さんの講演を聞いてみると、要約すると、

一、熱帯林を初めとする森林の大規模な破壊が世界的な関心事となっているのにも関わらず、どうすべきかの抜本的な手がいまだ打たれず、森林の消失スピードは加速している。

二、東南アジアでの深刻な熱帯林破壊は、その土地で伝統的な生活を営んでいた人達の権利がことごとく無視された結果引き起こされた。

三、「開発」「進歩」といった北の国々の思想に基づく南の国々での資源利用は、実際には南の多くの人々のいっそうの貧困、文化の消滅をもたらした。

四、日本の現状のような資源利用のありかた、さらには経済システム、ライフスタイルは決して長続きしないということに、私たちは気付くべきである。

イギリスの森林学者ジャック・ウエストビー、インドの経済学者ヴァンダナ・シヴァなど、自ら強い印象を受けた人々を引用しながら、わかりやすいかたちで熊崎さんは、熱帯林破壊が学者としての自分自身に問いかけたもの、保護運動の重要性、そしてこれからの運動の目指すもの、さらには日本に住む私達一人一人の生き方にまで及ぶ示唆を投げかけられました。

続いて行われたシンポジウムでは、三澤文子さん（建築家）、永田健一さん（家具製作家）、南俊二さん（自治体職員）をパネラー



◀会場から
猪俣栄一さんから
の意見・提案



◀(写真左)
パネラー各氏
右から
南俊二さん
(熱帯林きょうと)
永田健一さん
(家具製作)
三澤文子さん
(Ms建築設計)



▶(写真右)
総会司会の
前圭一さん
(奈良熱帯林保
護ネットワーク)

に、大西裕子さん(弁護士)をコーディネーター、熊崎さんを助言者に迎えて、当委員会の目指す方向性について話しあわれました。三澤さんは、「阪神大震災で、木造住宅は壊れやすいということがいわれるようになったが、被災地で倒壊した木造住宅についてその原因のある地区で調べたところによると、木造住宅だから倒壊したというよりも、作られ方があまりに杜撰で手抜きだったからだということの方が明らかになっている。家の建てられ方が15、20年サイクルで壊され建て替えられるという前提の下で家が建てられていることが問題。私達は60年間住み続けられる家を、充分納得のいく価格で造ることを目的にしています」と自身が建築する国内産木材産直住宅についての方針を語られました。

永田さんは、自身が手がける広葉樹材家具製造を紹介され、熱帯木材の合板家具にない味わい、耐久性、代々使える飽きのこないさ、修理ができるといった長所と、価格の問題を発言されました。

南さんは、京都市の住宅局で公共コンクリート建築の設計に携わってきた経験から、公共建築にコンクリート型枠として熱帯材合板が無駄使いされてきたこれまでから、針葉樹合板の使用、特記仕様書への熱帯材使用削減の記載といった、自治体キャンペーンの成果、しかし地方にはまだ波及していないこと、民間でも大手ゼネコンでは削減が進んでいるが、中小建設会社では遅れていることなど、現状の削減の動きの限界について述べられました。

その後の質疑応答では、自治体がどこまで熱帯材使用削減の政策をさらに積極的に押し進めていけるのか、特に住宅において国産材は合板の代わりを果たしうるのか、国産材の流通の現状に問題はないのか、などについて会場からの意見も交えて、熱心な議論が繰り広げられました。



関西熱帯木材使用削減委員会 (LONGHOUSE)



1995～1997年度プロジェクトの概要

1.趣旨

私たちは、日本をはじめとする国々が大量輸入を行っている、熱帯材をはじめとする木材の商業伐採が、東南アジア諸国を中心として深刻な自然環境・生活・文化の破壊を引き起こしている現状を憂慮しています。よって、私たちの木材の大量浪費の見直し、特に建築・家具製造において現状の熱帯産合板使用削減、およびそれに代わる代替案を政策提言として提示することにより、持続可能な木材生産による林業を確立したいと考えます。

2.10月より扱う領域・テーマ、およびその部会の概要

(1)自治体キャンペーン部会

日本の熱帯木材使用の約半分を占める土木・建築分野での、熱帯木材合板使用率のいっそうの削減をすすめるべく、代替工法・代替材料などの情報収集・調査を行い、報告書の製作を行う一方、関西の主な自治体で市民グループ・個人によって行われている公共土木・建築への熱帯木材使用削減の働きかけ(自治体キャンペーン)への的確な提言を行う。具体的には、報告書作成(2年以内めど)の他に、

- ・熱帯材使用削減の先行している関東で、当施策の打ち合わせが行われている「7都県市首脳会議」のような連絡会議を、関西でも開催するよう働きかけ、震災復興などの大規模再開発工事における熱帯木材の使用削減率の上昇を目指す。
- ・先進的使用削減施策の行われている自治体の例(「特記仕様書」への明記など)を広め、未施行自治体やその住民への情報提供を行う。

(2)住宅部会

熱帯木材が多く使用されているのみならず、長期の耐久性(数十年単位の)に劣る・室内化学物質汚染の直接的・間接的原因となる、などの問題を持つ合板を使用しない、主として国内産材による在来工法の住宅建築の普及を目指して活動する。

2年以内に報告書を完成させ、主として次の点について調査したものをまとめる。

[1]法制度・新築のための融資制度

- ・現行の建築基準法・金融公庫の融資制度などを調査し、改善案を提示する。道府県単位での地元産材住宅建設への追加融資制度についても調査する。

[2]国内産材流通・市場の実態調査

[3]実際に造られている家の実態の把握

価格帯や、機能、強度(強風への耐性或耐震性)など

[4]人材についての現状把握

[5]情報発信についての調査など

(3)家具部会

安価な家具を中心に、熱帯産合板が大量に使用され、日本国内の熱帯木材使用用途の1/3を占めるに到っている現実を踏まえ、家具における合板の使用のされかた、合板使用家具の利用のされ方、そして合板使用の削減に向け、調査、報告書作成、および熱帯木材使用削減のための取り組みを行う。

[1]家具における熱帯材の使用状況の調査

- ・使用量および使用目的、使用箇所
- ・熱帯材の種類および産出国・地域、それらの伐採にともなう現地での環境・人権への影響
- ・熱帯材合板使用家具の生産工程、生産コスト、流通経路、流通コスト
- ・現在の材質表示の実態
- ・家具の廃棄に関する消費者や業者の意識調査

[2]日本における家具の歴史の調査

[3]家具の熱帯材使用削減への具体的取り組みなど



SOS!! アマゾン熱帯林からの報告(20年間と) (20年間で) (4消失)

9.8
9.5
アマゾン熱帯雨林
焼き払い大規模に

南米アマゾンの熱帯雨林で開発のために焼き払われる樹木が、今年史上最大規模に達する恐れが出ている。ブラジルの経済回復で農業開発が進んだため、農家の煙と灰が上空を覆い、地球温暖化に影響を与える可能性も出てきた。

ブラジル国立宇宙調査研究所によると、七月の焼き払い量は四万件で、昨年同月の倍強。雨期が始まる十月までに焼かれる面積は、四国の広さと同ほ等しい一万余平方キロと推定される。

(共同)

九月二〇日、アンテノールさんやブラジル人二名、日本ブラジルネットワーク代表原後雄太さんを大阪に招く。主催は子ども権利センター。会場は高島。

アンテノールさんは、「森の破壊は、地球

Antenor de Assis

アマゾン先住民族アンテノール・デ・アシスさん
組織代表 9.9.15



熱帯林の破壊は進行していますか

「世の中にはシャツを着て帽子をかぶったブランコ(白人)という人たちがいる」。幼いころ父から聞いた。ほどなくして、そのブランコが村にやって来た。アマゾンの奥地に金を掘りに来たのだ。森の中に逃げ、木の陰から観察した。「確かに変なところではしているが、僕らと似ていなくもないじゃないか」と妙な親しみを感じた。

「熱帯林を守れ」「先住民を守れ」といわれて久しいが、いま政府は法定先住民地域の削減・見直しを進めている。アンテノールさんは「日本政府やJICA(国際協力事業団)らにも働きかけて欲しい」と語った。

「絶対には木を切るなどとは言わない。ただ、カネのためではなく、自立のために森の産物を売るんだ」という自覚がないと、森の持続的経営は成り立たない。もはや弓矢で敵を倒せる時代ではない。いま最も欲しいものは「敵と同じ武器」――すなわち、独立した事務所、電話やファクス、ネットワーク作りのためのコンピュータとアンテノールの村々をまわる四輪駆動車などだ。

「ブランコは森を破壊する外国人という意味。日本人も入る」。39歳。

サミットの頃に止まりかけたが、最近急激な乱開発が続く。今年は昨年の五倍以上も焼かれています。ブラジル政府や議会に圧力をかけてほしいと訴える。

原後さんは、「森林法での伐開は、保有

地の50%を自由裁量で行え、牧場等への焼払い、伐採が行える。八五年に改正があり、伐採限度を60haまでとして許可となっているが、名義を変えし違法な伐採が続いている。仮に20haなり一年で60ha消失し、次年で30haになり、四年で75haになる。私の住むロンドニア州では、僅か二〇年間で森林面積の1/4が焼き払われた。投機目的の森林伐開や、放棄された農地の牧場転換での原因が主だ。

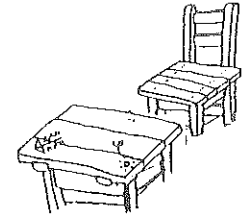
今、セラードと呼ばれるアマゾン水系上部地域約8万haに、約150億円(日本からの融資90億円)投下され、農業開発が行われようとしている。だが、セラードを壊せば、アマゾンを大きく破壊することになる」と。

アンテノールさんらは「日本政府やJICA(国際協力事業団)らにも働きかけて欲しい」と語った。

※日本ブラジルネットワーク
東京都新宿区荒木町3番地8号
馬場4F(☎03-3341-9818)

家具

〔3〕



◆手作りに挑戦

興村知亜子

安易に物が手に入り、誰がどんなふう
に作ってくれて、どこから、どうや
つてくるのか、分からなくなつてゆく
中で、ますます私達の社会は冷たくな
つてきているような気がしています。
熱帯木材を使い捨てている背景には、
手作りから遠くなつた私達の淋しい暮
らしがあるのかもしれない。

サラワクの村に入ったとき、自分の
家の簾のマットを編んでいたお母さん
を思い出し、台所に置く調味料棚を作
つてみました。余つた木切れは、子ど
ものオモチャにもできました。だんだ
んできてゆくのを楽しみにしていた子
どもが、不細工な作品にも拍手を送つ
てくれました。

何百年も、様々な動植物と共に暮らしてきた大樹が、身近な暮らしの中で、
知りれずに使われ捨てられてゆきます。その木々の叫び、悔しさを感心し取れる
ようになりたい。もう少しづつでも、温もりのある暮らしができるよう活動して
ゆきたいと思つています。会員の皆様とも、共に考えてゆけたら幸いです。

(興村知亜子)

熱帯雨林保護を訴え
ている市民団体「ワー
タン・森と生活を考え
る会」(北区中崎西一、
西岡良夫事務局長)が
初心者向けの啓発パン
フレット「家の中の熱
帯林」を発行した。家
具に使われているベニ
ヤ板、合板の消費量な
どから、日本の熱帯木
材の使い捨てぶりを説
明。長くお付き合いで
きる家具を薦め、手入
れの方法やリサイクル
情報なども提供してい
る。自然保護という付
加価値、こだわりのあ
る生活へのススメだ。
(和泉かよ子)

安くて加工しやすい熱帯
木材の大衆使用は、日本の
住宅事情とも関係する。都
会の狭いマンション暮らし
で、職人手作りの和家具や

熱帯雨林保護は家庭から

「家の中の
熱帯林」は、粗大ごみを再
生する市民工房▽学生のため
のリサイクル市▽再生紙
でできた家具の販売業者「
」など使い捨てから脱出す
るための情報が盛り込んで
ある。狭い部屋で安い家具
に囲まれていても、南洋の

95/10/7 毎日新聞より
抜粋

啓発パンフレットを発行

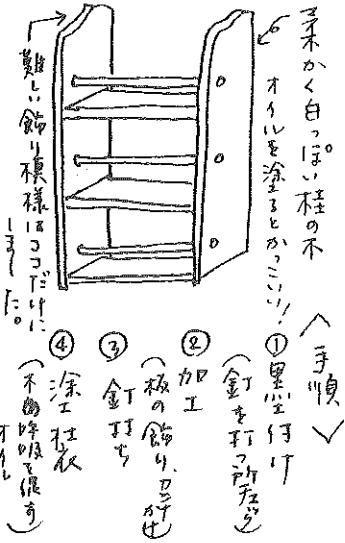
家の中の
熱帯林
家具になる熱帯木材

興村 知亜子

公民館の文化講座で十二月にウータンの講座で家具の話をする永田さんが教えられていたので、参加しました。

★参加者及和氣あいあい

電動糸ノコが大活躍。飾り模様をつけてひと工夫と、皆はりきります。家から色んな板切れを持ち込み、こっそり(目立ってる)好きなものを作っている参加者。気のいい永田さんは丁寧に指導してくれ、ひとりひとりの板にカンナをかけられます。「ついでにお願い！」と黒ずんだマナ板を持ち込む人も互いの出来を眺めつつ、よもやま話に花を咲かせて作りました。



◆安全な住まいづくり〜あぶない建材



足立 和郎

合板家具についてもものすごい臭いがします。カラーボックスを見てもらっても分かるとおり、あの臭いがまともなわけはありません。塗料が駄目。

合成樹脂塗料ですが、ほとんど石油で造られたものしか日本にはありません。しかし日本でもいい塗料を作っているところが現れました。ドイツ製の無公害塗料と言われているものがありますが、ドイツ製も一〇〇%無公害ではありません。一般の塗料はマグネシウム、鉛がかなり含まれています。ガソリンでも鉛が危険だということで、禁止になっていますが、塗料は規制されていません。

木材では、合板にはホルマリンがたくさん含まれています。ホルマリンの規制はF1合板がJASで決められています。F1合板はホルマリン(ホルムアルデヒド)が出る合板は考え直さないといけないと思います。

それから、ラワン材を使っている合板だとほとんど防虫処理をしているので、すごい臭いがします。これも揮発します。それを考えると二×四住宅は地震には強いですが、化学物質に対しては非常に危険です。

CCA材木というものがりますが、クロム・銅・ヒ素の化合物なのです。住んでいる

人に対しては害を与えるものではないのですが、環境コストがものすごくかかります。燃やすとダイオキシンがでますし、埋めると地下水を汚します。こういうものは絶対に使わないほうがいいです。これは環境庁も問題にしています。防虫済み材木、ラワンなどは臭化メチルで燻蒸されています。そのほか農薬がかなり入っています。臭化メチルはオゾン層破壊の原因になると言われているもので、これも使用禁止にするべきです。農薬が散布されているラワンなどは、農薬汚染を引き起こします。

自然環境を基本とする家で冬暖かくて、夏涼しい家で省エネ住宅を推進していきたいと思っています。国産材を多用するのは、日本の産業を日本人が支える意味です。少し高くても、国産のものを買おうじゃないかという雰囲気生まれてもいいと思います。アメリカにたくさん輸出して貿易摩擦があるから、今度は住宅を買おうとするなら、アメリカに車を売らなくてもいいのではないかと。向こうの製品を買うのも少しいい。お互い自国のことは自国でサイクルさせていくことを考えていったほうがいいと思います。

月刊「むすぶ」臨時増刊号「九五九年九月より」
 発行「ダンチン」社/電話0757-210647

連絡先：〒601-05京都府北桑田郡京北町塩田
 (向)パハロカンパニー自然住宅研究所

☎077-1541016

最後の熱帯林「パプアニューギニア」をたずねて

8月半ばの約一週間、パプアニューギニアを訪れた。今年は、夏に4回だけ関西空港から首都のポートモレスビーまで直行便が飛ばぬき、この機会を逃してはならじと東京の「パプアニューギニア・ソロモン諸島の森を守る会（以下「森を守る会」）のスタディーツアーに参加することにした。

パプアニューギニア（以下PNG）は、インドネシアの東、オーストラリアの北に位置し、世界で二番目に大きな島、ニューギニア島の東半分と、周辺の島々からなっている。面積四六万平方キロメートル（日本の約一・二四倍）、人口約三六〇万人。七〇〇以上の民族に分かれ、八五〇以上の言語があるとされている。国民の多くは村に住み、自給自足的な農漁業で暮らしている。七五年、オーストラリアから独立。国土の八〇パーセントが熱帯雨林気候に属し、世界で最も多様性に富んだ森と生態系を育んできた。東南アジアの熱帯木材資源が枯渇しつつある現在、PNGの森は「最後の熱帯雨林」として注目を集め、急激に伐採量が増えている。

八月二日（土）午後九時、尾翼に極楽鳥マークの入ったエア・ニューギニア（PNG 国営航空）チャーター機に搭乗。時期が時期だけに乗客は戦没者慰霊団がほとんどかと思いきや、意外にダイビングや観光（特に高地の民族芸能）が目的の人も多かった。同行は「森を守る会」の辻垣さん、松本さん、ウータンの荒木君の三人。辻垣さんは、熱帯木材を使わない建築に取り組んでいる建築家。松本さんは、「紙」をテーマに世界各地を調べてまわっている人で、本職は高校の社会科教師。

翌朝、五時前にポートモレスビー着。六時間半の空の旅だった。（時間は日本より一時間早い）気温24℃。風があつてかなり涼しい。

その日は、ニューギニア島北部の町マダンへ日帰りで出かけ、翌朝、もう一人の参加者市岡さんと落ち合い、国内便でニューブリテン島へ。空から見ると島のあちこちに火山がある。実際この島最大の町、日本でも軍歌で有名なラバウルは、昨年の噴火のために多大な被害を被り、現在復旧中と

のこと。島の最大の産業は木材、次がオイルパーム。

ホスキンス空港には、七月末にPNG入りした「森を守る会」の清水さんが迎えに来てくれていた。彼女はカソリックのシスターで、毎年一、二ヵ月PNGに滞在し、森林伐採の状況などを調査している。これで今回のツアーのメンバーが全員揃った。トラックの荷台に乗り込みブルマ村へ。

ブルマ村のすぐ近くに、日本の総合商社日商岩井の現地法人（PNG政府との合弁企業）ステイン・ベイ・ランバー社（以下SBLC）の本社がある。「森を守る会」では、SBLCの伐採・植林が引き起こしている様々な問題について、東京で日商岩井と交渉を行ってきた。その続きを現地で行うというのも今回の目的のひとつ。

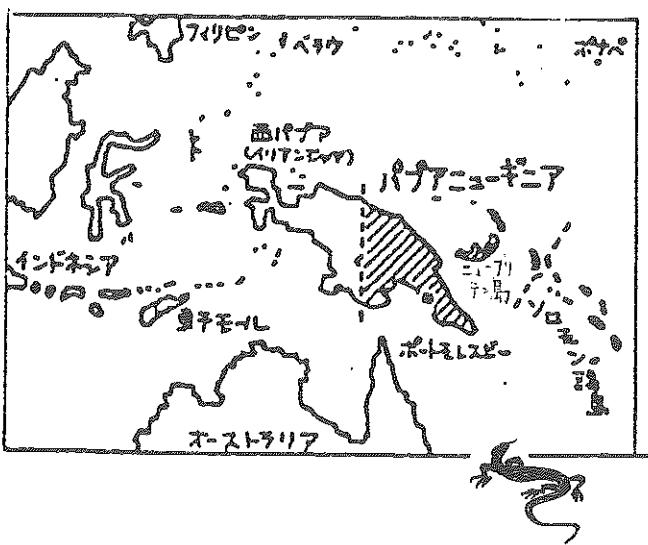
この日は、社長の太田さんが不在だったのでSBLCの伐採・植林現場を、生産担当の藤川さんに案内してもらおう。日商岩井からの出向社員で、入社以来木材部広葉樹



課一筋。SBLCは七六年からの三年間に
 続きこれが二度目とのこと。気さくな人柄
 の上、神戸出身でカソリック信者というこ
 ともあって、道すがら話はずんだ。
 まずモペリ植林地区に案内される。苗畑
 があり、様々な成長段階の苗木が植わって
 いる。ここで植林しているのは、カメレレ
 (PNG原産のユーカリ) エリマ、ターミ
 ナリアなど。地元の樹種で成長の早いもの
 を選んで植えている。古いものでも、植え
 てからまだ三〇年たっていない。最初に植
 えたものは間もなく伐期を迎えるが、まだ
 どういう用途で売るか決まっていないとの
 こと。見学コースになっているらしく、日
 本の財界人や政治家の記念植樹が並んでい
 た。その後、近くの小高い丘に案内された
 展望台があり、そこから付近の植林地が一
 望のもとに見渡せる。濃さの違う緑色の帯
 が並んでいる。エリマ、ターミナリア、カ
 メレレをパッチワーク状に順ぐりに植林し
 ている。整然とした感じで、川の両岸に残
 っている天然林(川岸五〇メートルは伐採
 禁止)とは明らかに違う。このパッチワー
 ク状の森を見て、美しいと感じる人もいる
 かも知れない。しかし、私にはのっぺりと
 した無表情な森に感じられた。これは、多

様な天然林を皆伐した後に植えられたもの
 なのだ。

現在伐採を行っている場所までいく予定
 だったが、雨で道路がぬかるんでいたため
 引き返す。プルマ村に戻って、夕暮れ時か
 ら村の地主たちの話を聞く。SBLCが補
 償を払ってくれない、伐採のため泉の水量
 が減ったと語る男達の後の道を、丸太を満
 載したトラックが、暗くなってもなおお台
 も走り抜けていくのが印象的だった。



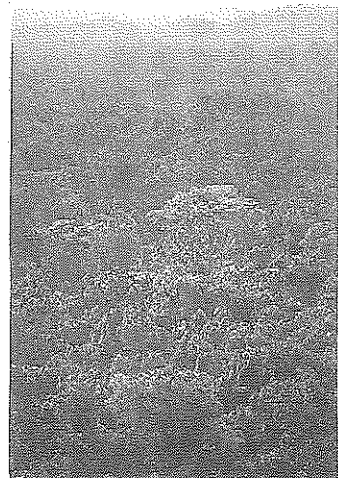
(辻村方孝記)

ホムス才産です。
 おじやます!



ニ直所の
 リンバイ

(会員エルの提供です)



APEC、貿易・投資自由化は環境破壊を拡大する！

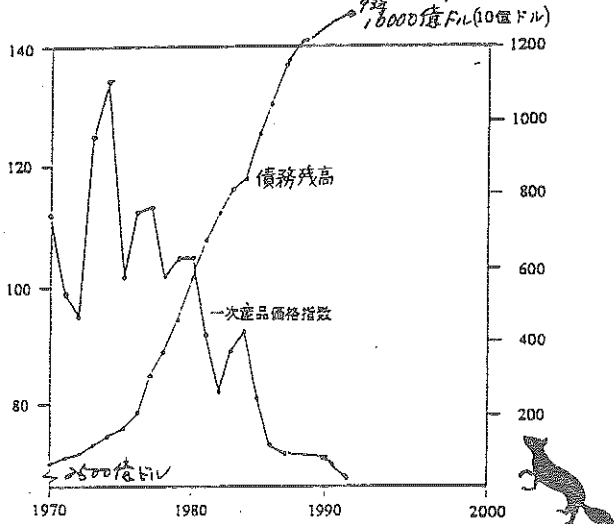
事務局長 西岡良夫

「南北格差拡大、環境破壊のAPEC」
 「ドはどうしても儲ける、レは：」
 というAPECの替え歌が某番組で流れていた。全く真意を突いていて笑ってしまったが、ほんとは笑い事より自由貿易化で環境破壊、人権侵害、経済開発等で悲惨になるのだ。

現状の大きな問題は、南北間・国内間の不公平・富の不分配、資源管理等の主体問題、人口爆発、経済成長と債務増加、回復不可能な環境破壊、法規制、情報公開と市民参加、資金負担だ。例えば、「途上国」の債務残高は一九七〇年に二五〇〇億ドルだったが、九三年には一兆六千億ドルと膨れ上がり、債務返還不能や国家財政圧迫という事態を引き起こしている。「途上国」は、第一次産品輸出のために国土を破壊しているのだ。また悪名高い世界銀行93年報告でも「環境破壊は当該国のGNPに一〜一五%負担増」と述べている。森林国での乱伐は、より経済的損害が高い。ハイチでは森林破壊により農作物の生産が以前の三分の一に落ちこ

んだし、フィリピンでも乱伐で農作物被害ばかりか、土砂流出で今まで一万人弱が亡くなっている。フィリピンの場合は、日米の伐採会社、商社による原因も多い。
 一方、戦後建てられた東京都の建築

〔図1〕 一次産品価格指数と第三世界の債務残高 (1970~2000年)



注：価格指数は1979~81年の価格を100とする。
 出典 (World Bank, World Resources, 1988) 等より作成

物の平均寿命はわずか一七年という。フィリピンの森を売げ山にして、コンパネも使い捨てられている。「先進国」は、鉄、アルミ、紙など資源の8割を使い、「途上国」へ公害等の被害をもたらせている。

今、APECで貿易自由化、関税引下げがされれば、日本円が強いためますます第一次産品の切り売りが行なわれるだろう。環境破壊と債務増加が加速するだけだ。

【資源の大幅使用削減が必須条件】

APECは、貿易・投資の自由化、持続的経済開発を指針としているが、『議長案』で環境についてバーチャール・センターの建設しか提案されていない。その施設は情報・環境技術輸出センターである。

環境技術「協力」とは、ほとんど環境保全に寄与しないばかりか、提供した技術の資金が企業に還流する形になっている。ある程度の公害防止等に寄与しているが、根本的な解決にな

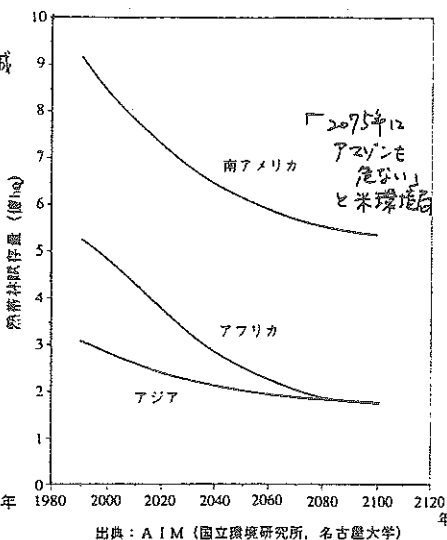
らず、社会経済システムの変革とは全く逆の道となる。

まず第一になすべきことは、社会経済システムの変革と環境破壊に歯止めをかけることではないか。ドイツのある学者は「先進国の資源利用を今の90%にしなければ持続可能な社会もない」という。環境破壊する伐採、天然資源の乱開発は直ちに中止すべきだ。

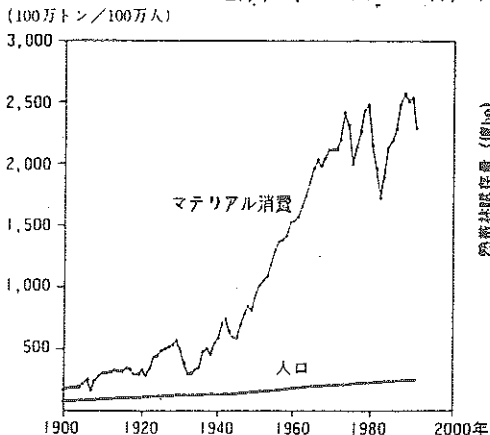
そして環境価格を含んだ値段を今後導入することも必要だ。例えば、熱帯林を破壊して出来たハンバーガーは、環境価格を入れると一個二五〇〇円もするという(ニューヨーク大試算)。再生困難なモノについては、百倍どころか一万倍か一千億倍の価格になる。鉄、アルミ、その他の合金も然りだ。

こう考えると、日常の有り余る消費生活を大変革しなければならぬ。そして資源の再利用率や再資源化を増やし、使用抑制を目指す社会にせねば未来はない。どれだけ出来るかが問われている。経済成長至上主義の開発。自由化なんてとんでもない話だ。だから某新聞の一面記事に書かれた十月十四日、APEC・NGO環境シンポで、私は「APECなんてやめてまえ」言ってしまったのだ。誰のための、何の

【図2】 予想される熱帯林減少量の地域別比較



【図3】 米国のマテリアル消費量および人口の変化, 1900-91年 (出) DOI, BOM, etc. 1991年



ためのAPECが明らかだから。

「目標設定と変革への連携が必要」環境価格設定や再資源化を図るため

出典：A I M (国立環境研究所, 名古屋大学)

に、森林はまだ再生可能なほうであり、まだ展望がある。温暖化問題は多岐にわたる困難がある。CO₂やフロン、メタンガスは毎年急増し、このままでは二〇五〇年に気温が二〜三度上昇し、水没、洪水多発、干ばつで食糧生産の減少、生態系の破壊が予想され、世界の経済市場をも大きく変動させる。化石燃料、原発の利用大幅削減しかない。これが大変難しい。それに比べ、木は変換性もあり、再生もある程度可能であり、木の寿命と再生と使用削減を考えれば、まだ未来に間に合う。しかし、いつまでに、どれだけ使用削減するか目標設定することが不可欠だ。例えば日本合板連合会が熱帯木材の使用を二千年までに五〇%削減する提案をした。東京都も同様の目標を掲げた。これが実行出来るか、今後熱帯林保護運動が後押ししなければならぬ。私も含めて暮らしの大変革が必要だし、多くの人々の意識改革と使用削減への連携が必要とされる。オランダのように「建築物は廃材などの再利用を九〇%にする。熱帯材不使用とする」目標例が私達の課題だ。



THANK YOU!
プレゼントに届いたお便り

*一、二年以内に住宅の立て替えを考えています。次の団体の連絡先を教えてください。

国産材住宅推進協会・関西自然住宅ネットワーク・古材バンクの会・自然調和住宅研究会・Ms建築設計事務所

連絡をとって、どのように立て替えをするのが良いか考えたいと思います。大阪市Y
……どしどしおたずねください！

*建物の新築工事現場の前を通るたびに、真新しい合板が目についてしょうがありません。コンパネの使い捨てはさつぱり改善されていません。ホントにこれはヤバイと思っ
てます。
横浜市 A

*「家具アンケート」に協力します。
自分は将来、木工の工房を持ち、家具を作りたいと思っています。昔から家具が好きで、木の肌が好きだった私には、とてもショ
ックな記事でした。日本でどのように家具
がつくられ、無駄に木材が使われているの
か、ぜひ知りたい。(後略) 神奈川県 S

*(前略) 東京都では再生紙の公共ブランド
ができ、ティッシュペーパーなどが販売さ
れるようですが、家具についてはまだ動き
がほとんどありません。(中略)「家の使
い捨て」が当たり前の日本で、安く仕上げ
ようと合板を使い、接着剤が多用されて、
「カクテル効果」が心配です。 東京都 S

*私は現在十四才ですが、友達によびかけれ
ば、あるていどの人数となるはずで
す。
アンケートにぜひ協力したいのです。用紙
を送ってください。
群馬県 N



家具アンケートに沢山の方が協力してくだ
さいました。ありがとうございます！
結果はおつてお知らせします。
………
「会費・カンパをいただいた方」(敬称略)
〓十一月二十三日まで 振込分〓
荒川共生 井上真 今井順子 川下知明
グループ地球人 児玉かずみ 古南幸弘

佐藤大介 汐見文隆 志儀真山美 渋谷
弥生 高橋敬一 玉山ともよ 苗村真代
中島小夜子 成岡卓翁 パプアニューギ
アとソロモン諸島の森を守る会 早川和佳
子 松本剛一 溝口正美
「裏返し封筒をいただいた方」
梅尾文子 鈴木達子 谷朱子 藤村はるえ
………
みなさん、ありがとうございます！
一緒に、一つ、ひとつ変えていきましょう。



森計まりおねがい
今年も、みなさんに支えられて活動を続
けることができました。
来年もひき続きご協力いただければ、
また一步、進めます。
なにかと物入りの時節に恐縮ですが、
96年度会費(年三千円)・カンパをよ
ろしくお願いいたします。(同封の振替
用紙をご利用ください)



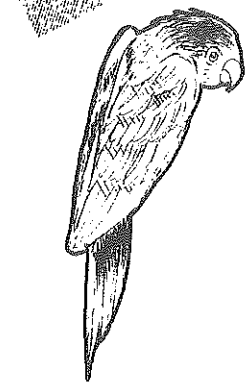
連載 「熱帯林を考える」

11 南洋材開発輸入の軌跡

熱帯林業とは何だったのか

(その四)

徳島県熱帯林問題研究会・猪俣栄一



◎ 前回の連載に対して、何人かの方から「一ヘクターから数本しか切らないのが、なぜ収奪林業なのか」とか、「善意のボランティア活動が行なっている植林も悪いのか」というお尋ねやご意見を頂きました。

この方々の他にも同じような疑問をお持ちの方がおられると思うので、一部が前号と重複するかも知れませんが、まずこのお答えから入りましょう。多少専門的な話になりますが、最近、国産材や国内林業について関心をお持ちの方が増えていますので、参考にしてください。



(一) 択伐と保続原則

森林を伐採して木材を収穫する方法には、皆伐と択伐があります。皆伐は

伐齢期に達した一斉林を、いっぺんに切って収穫したり、樹種転換(拡大造林もこれにあたる)をする際にとられる伐採方式です。跡地の整理や更新に便利で効率もよいのですが、地力が一時的に弱まり、環境破壊の原因となります。

それに対して択伐は、一区画内の伐齢期に達した木を、少しづつ伐採する方式のことです。具体的には、目通り六十センチ以上とか、五十年生以上の木だけを切ると決めてある場合、五年とか十年、或いはもっと長い間隔を置いて、それに該当する木だけを切りまします。また同じ年数たてば、前回伐採基準に達していなかった木が成長するので、その分だけを切るのです。

その最も極端な方法を保続施業と言

って、毎年一定の地域から一定量を持続的に収穫する方法です。これらの方法は皆伐と較べて、森林の樹種、径級、蓄積量がほぼ似た状態に保たれ、地力も衰えず、山地災害を防げるし、自然環境も保全され、林業生産力を持続的に拡大できます。はやりのことばで言うと「持続的開発」ということでしょう。

このように言うると択伐はよいことづくめのようですが、問題もあります。伐採したり林外に搬出する際に残存木がどうしても傷つけられますし、それを最小限にとどめようとすると、作業能率が落ち、生産性が下がります。

ですから戦後は、一部の国有林や天然林施業に限られ、人工林は皆伐になっっていました。それが最近では、針葉

樹人工林でも複層林仕立てと択伐が奨励されています。つまり日本の林業政策は、短期間で猫の目のように変わるのです。



(二) 択伐施業の要件

以上でも判るように、択伐をするには一定の要件が必要なのです。

まず、対象の森林を綿密に調査して(毎木調査)、樹種ごとに切れる対象木と、基準以下の後継木の本数や状況をリストアップし、何年ごとの択伐が適当かを判断して、計画を立てねばなりません。

二番めに、跡地処理と更新の計画を立てねばなりません。できれば樹種分布が均等になるような植林も必要です。三番めに、何よりも残存木を傷つけないようにしなくてはなりません。十年とか二十年後に伐採する予定の林木もさることながら、これから育ってゆく小さな幼木も大事にする必要があります。

以上の三項目は、我が国だけでなく林業先進国では基本的な措置と考えら

れています。

(三) 熱帯林での伐採の実態

では、日本の商社が東南アジアの熱帯林で伐採を行った際、以上のような原則を守っていたのでしょうか。端的に言うと、守られていたのなら、今頃熱帯林の減少がこれほど問題にされることはなかったでしょう。

まず、第一の事前調査の点です。事前調査は確かに実施されました。商社が自分でやる場合もあり、コンサルタントに委託してやる場合もありました。しかしその目的は、先程書いた内容とは全く異なります。

日本で択伐をやる対象林は、一つの区画が数ヘクタールから、せいぜい数十ヘクタール程度です。ところが、熱帯へ進出する商社が現地政府から貰おうとする林区(伐採権)は、数万ヘクタールから十数万ヘクタールで、しかも人跡未踏とも言える原生状態のジャングルです。ヘリコプターか、スピードボートで行く以外、道もありません。きめの細かい毎木調査は、せいぜい



一ヘクタール程の場所を何ヶ所か選定しての、サンプリング調査しかできません。それも、調査の目的は許可を貰っている数年の間に伐採し得る対象木(胸高直径が五十センチとか六十センチ以上、ラワン類を中心とした特定の有用樹種に限る)の蓄積量の調査です。

それによって、政府に支払う林区権利金、毎年払う伐採税、道路開設費、投入する重機代、その多一切のコストの許容額を見極め、事業に着手するかどうかの基礎資料にするのです。だから、跡地更新のデータとは全く無縁なのです。

第二の点については商社が悪いだけではないのです。前号に書いたように、全部が国有林または州有林で、所定の許可年数を経過したらオペレーション基地を閉鎖して引き揚げねばなりません。つまり造林等の跡地処理は、伐採をした商社の責任ではなく、伐採権料を徴収した現地政府の仕事なのです。だから、更新作業もしないのに、その為の調査をする必要はないのだということになります。場所によっては一

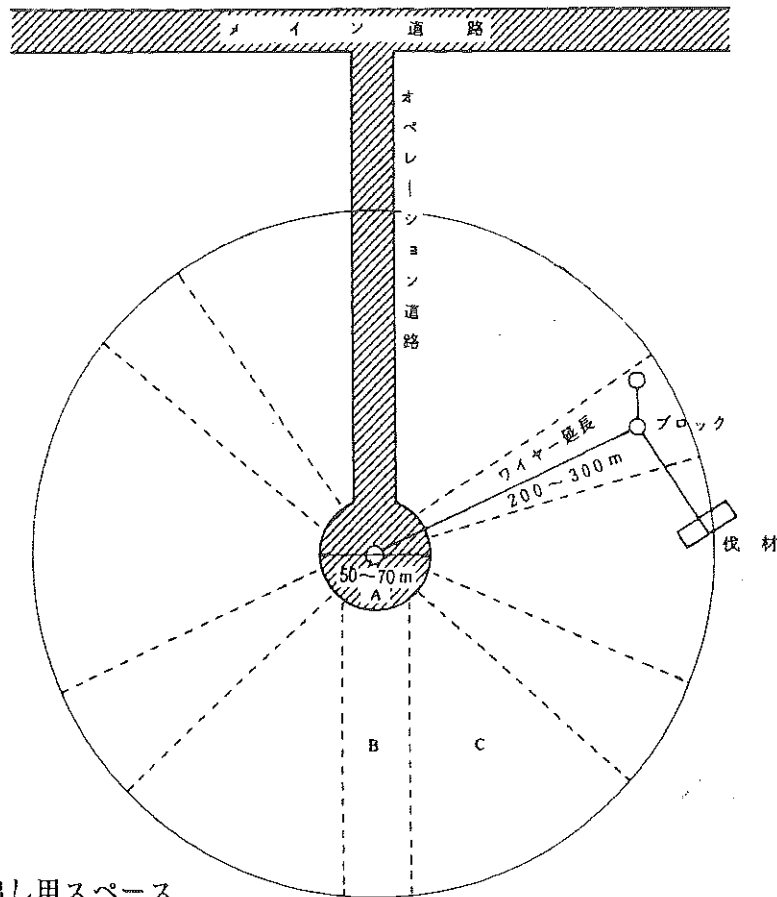
時期、商社に伐採後の造林を義務づけたところもありましたが、造林というものはとても三年や五年でできるものではなく、従ってこれは土地所有者が行うものなのです。

日本でも、このようなシステムは、国有林、民有林ともによくあることです。立木処分とか立木販売とか言っていて、伐採する立木の値段だけを決めて売り渡し、伐採終了後、山林所有者が自分で再造林するのです。

その方が、きめ細かく、愛情のこもった造林と管理ができるからです。そのかわり、立木の売り渡し価格の中には、当然のことながら造林費用等も含まれております。

東南アジアでの森林荒廃の原因は、全部が国有林であったために、伐採権方式を取りながらそれらの国が跡地の手入れを行わなかったところにあります。今日振り返ってみて公平に考えると、どうも伐採した商社より、莫大な伐採権料を徴収しながら、その金を跡地管理に還元しなかった現地政府にあったと考えた方がよさそうです。

伐採現場図



- A. 作業場空地
- B. 伐採材引き出し用スペース
- C. 伐採対象地

第三の点については、文句なしに伐採を行った商社の責任だと言えまじょう。たしかに、伐採して持って帰る材はヘクターあたり数本であっても、その材（枝下部分を一本のまま運び出すのがほとんど）を運び出すにあたって、信じられないほどの支障木が出ます。

図は、フィリピンの低山地で実施されていたオペレーションの見取り図です。尾根添いに運搬用のメイン道路（五、六メートル幅）をつけ、二百から三百メートル間隔で道路と直角に作業道（幅四メートル）を延ばし、その突端に直径が五十から七十メートルの作業場を作ります。そこに高さ二、三十メートルのスタンションを立て、その先端にブロックをつけて、強力なディーゼルエンジンウインチにより、ワイヤーで伐採木を引きずって来る方式です。

ワイヤーの太さは十五ミリくらいで、長さは二百から三百メートルです。この図のメイン道路とオペレーション道路は勿論のこと、作業場（図中Aの部

分）も立木は一本残らず切り倒され、伐採の引き出し用スペース（図中Bの部分）も伐採木を引きずるため、細い木は全部薙ぎ倒され、倒れないような太い木は地面すれすれの所で切り倒されます。

伐採対象部分（図中Cの部分）でも似たようなことが起こります。つまりこのような作業方法だと、作業が終了した後、無傷の立木はほとんど見当たらないという状態になります。

ですから、高名な学者までが「抜き切りだから森林は傷まない」と言っているのは、どうも現場を見ない受け売りのような気がします。現に、一緒に見に行ったフィリピン人の伐採業者自身、「一度伐採した跡に木は育たない」と言っていました。



〔四〕熱帯林を守るとは？

本来、森林とは単なる木材資源のソースだけではありません。土中の微生物からはじまって、大型哺乳類や猛禽類に至るまでの動物、コケやシダのよゆうな草木類まで、実に多様な生物の種

が、樹木を中心にひとつの生態系を形づくっております。その意味で、私は森林そのものが、ひとつの大きな生命体であると考えています。

だから、その構成要因のどれが欠けても、生命体としての森林は、存在を脅かされるのです。そういう意味で、ラワンを伐採して、その跡へ早生樹種を植えてみたところで、生態的には何の意味もありません。木質資源を使う人が喜ぶだけなのです。

南米やパプアニューギニアやタイ、その他で進行中の造林活動が「緑による森林の破壊だ」というのは、そうした意味なのです。生態学をやる人たちは、その点を充分考えてほしいと思います。

（つづく）

森の真直館

photo 西岡 良夫

③



・悲しき森の住人（サラワク州クチン市の保護区で）

オランウータン〜「オラン」とは住人、「ウータン」とは森という意。サラワク、サバの森が次々と乱伐され、彼等の住み家は僅かしか残されてない。多くの森があつて多くの生物が棲んでいたのだが…。今は森林保護区などでしか彼等と会うことが出来ない。

HUTAN ACTION SCHEDULE

はんの楽でしよう?



連続講座 Part III 『暮らしの中の熱帯林』①住宅編は、「国産材をつかおう」という、安全な家を、しかもお手頃な値段で、参加者が少なくても、真剣な質問もできました。(報告は次号で)

1月21日(日) 1:00~ウータン総会
「サラワク最新報告」 神前進一さん
中央青年センター (JR・地下鉄「森之宮」)
☎(06)943-5021

《暮らしの中の熱帯林》

熱帯林連続講座・Part III

12月17日(日) 1:30~

その2 『家具』

永田健一さん(家具職人ZOO)

2月17日(土) 6:30~

その3 『ごみ・廃材・リサイクル』

山本達士さん(神戸学生センター)

中院彰子さん(大阪ごみを考える会)

3月23日(土) 6:30~

その4 『紙』

松本剛一さん(地域自立発展研究所)

4月21日(日) 1:00~

その5 『海を越える資源』

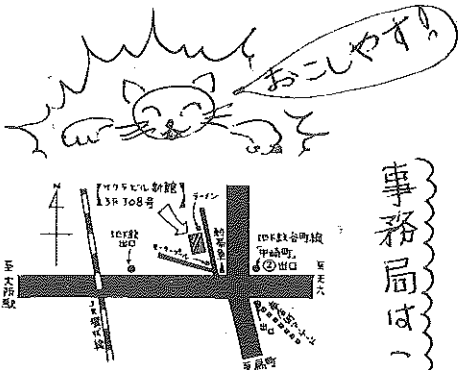
(アースデイ・イベント)

西岡良夫(ウータン)

Tel.(06)941-6332
アピオ大阪
大塚公園 森之宮 大塚駅
JR環状線

地球を想い、日々の「暮らし」を変える

(アピオ大阪は森の宮駅より2分)



事務局はこちら

ウータン定例会は、第2と第4火曜午後7時半から、関西市民連合「事務所(上記地図にて行っており)まで。
TEL:06(372)1561

カミトは児童書
ちぎきゅうはちぎき
ちぎきはちぎきゅうより

家具、住宅、APECなど、取り組むことはドンドン増えます。求む、オタスケ(ウー)マン! 日本で売れる」という小説「タイムショック」も身につまされます。あなたの「時間」をちよっぴり「森をまもる」ためにわけてくださいませんか? (地球のいきもの一同より)

編集後記

